

< 論 説 >

エクスプロイテーション（搾取）概念の系譜

—サン・シモンからヌスバウムまで—

山口 拓 美

はじめに

19世紀以来、資本主義批判の文脈で EXPLOITATION という語が用いられてきた。本稿は、主だった論者達によるこの語の使用例を検討することによって、この語に付与されてきた意味の広がりや把握しようとするものであり、また、とりわけマルクスの EXPLOITATION 概念の特徴を明らかにしようとするものである。取り上げる論者は、サン・シモン、サン・シモン主義者、ブルードン、マルクス、エンゲルス、カウツキー、バルンシュタイン、およびヌスバウムである。マルクスを中心に置き、マルクスに影響を及ぼしたと考えられる論者と、マルクスの影響下にあった論者の著作を検討対象とする。

その際、本稿では、EXPLOITATION をエクスプロイテーション、その動詞形をエクスプロイトなどと英語の発音に即してカタカナ表記する¹。その理由は、これまでこの語が「搾取」「開発」「利用」「制覇」等々と、様々な日本語に訳されてきたことから分かるように、この語が持つ意味の広がりや担い得る一個同一の日本語が存在しないことにある²。EXPLOITATION は元来フランス語であることから、この語をカタカナに変換する際には、フランス語式に「エクスプルワタシオン」とでも表記するのが正当であろうかとも思われるが、現在の日本社会における英語の地位や、現代の英語文献におけるこの語の使用頻度の高さ等を勘案し、英語式の綴りの読み方を採用して「エクスプロイテーション」と表記することとする。また、ドイツ語の AUSBEUTUNG については、これをアウスボイトゥングとカタカナ表記する。

1. サン・シモンとサン・シモン主義

サン・シモンは、1819年から1820年にかけて刊行された『組織者』の中で、人類の過去と将来社会の展望を次のように述べている。

「人類は現在まで不平等な二つの部分に分割されてき³」た。一方は他方を支配するために全力を用い、他方は支配を押しつけるために力の大部分を用いてきた。このような「人間に対する人間の行為は、それ自体、精力の二重の消耗をもたらすので、人類にとって常に有害である⁴。」そこで、「もし人類が互いに押えつけ合うことをやめて、自然に働きかけるために合同した力を結

集させたならば⁵⁾、人類は大きな繁栄を享受することができる。実際、これまでも「人を支配しようとする欲望は、自然をわれわれの意のままにつくり上げ、つくり変えようとする欲望にと次第に変⁶⁾わってきた。「新しい政治秩序においては、社会組織は人間の欲求を満たすために科学、美術、工芸の分野で獲得された知識を最大限に利用すること⁷⁾、すなわち自然に働きかけることを「唯一・恒久的な目的としなければならない⁸⁾」。

マルクスによれば、この時期のサン・シモンの著作は「封建社会に比べての近代ブルジョア社会の賛美⁹⁾」にすぎなかったのであるが、彼の最後の著作『新キリスト教』の中で「ようやく、直接に労働者階級の代弁者として登場し、この階級の解放を彼の努力の究極目的であると宣言し¹⁰⁾」た。サン・シモンは、『新キリスト教』の中で「人間は最大多数者に最も有益でありうるように社会を組織しなければならない¹¹⁾」と述べ、「最も貧しい階級のためをはかって人類を再組織する¹²⁾」べきことを主張しているが、マルクスがいう労働者階級の解放とは、サン・シモンのこのような主張を指していると考えられる。

サン・シモンが没してから約3年半の後、バザールを中心とする彼の信奉者たちは、1828年から1829年にかけて「サン・シモンの学説」についての連続講演会を開催した。その中でサン・シモン主義者たちは、上記のようなサン・シモンの思想を、エクスプロイテーションという語を用いて、次のように表現している。

「人間による人間のエクスプロイテーション、これが過去における人間関係の状態であった。人間と手を結んだ人間による自然のエクスプロイテーションこそ未来が示す姿である¹³⁾。」

ここに現われる「人間による人間のエクスプロイテーション(搾取)」は、資本主義批判に用いられるフレーズとして、最も有名なものの1つであるといえる。彼らのこの連続公演会は、『サン・シモンの学説・解義』として出版されるが、そこではこのフレーズが繰り返し用いられ、このフレーズに導かれながら、次のような思想が述べられている。

人類の歴史において、戦争の勝者が敗者をすべて殺戮することを止め、敗者を奴隷として使うことを始めた時に、人間による人間のエクスプロイテーションが始まった。人間による人間のエクスプロイテーションとは、端的には奴隷制のことである。奴隷は、生活全体がまるごとエクスプロイトされていた。「奴隷は人類の外におかれる¹⁴⁾」存在であった。エクスプロイテーション関係が、主人と奴隷から、貴族-平民、領主-農奴、徒食者-勤労者と変化するにつれて、エクスプロイテーションの度合いは弱まってきた。とはいえ、現代の勤労者の大多数を占める労働者階級は、「ゆるく婉曲な形態¹⁵⁾」においてではあるが、相変わらず高度にエクスプロイトされている。主人と労働者との間の取引は労働者の側の自由になるものではなく、労働者が生命を維持するために受け入れざるを得ないものである。「労働することが労働者の意志によるものではないことは明らかである¹⁶⁾。」労働者は「知的能力や道徳的愛を発展させる時間¹⁷⁾」を持つことができず、「禽獣状態¹⁸⁾」に置かれている。「かつて奴隷がエクスプロイトされていたのと同じように労働者が物質的、知的そして『道徳的』にもエクスプロイトされていることを認めるためには、

われわれのまわりで起っていることを一目見れば十分である¹⁹」。

サン・シモン主義者は、社会の現状をこのように把握した上で、この人間による人間のエクスプロイテーションが所有権の構造に由来するものであることを明らかにし、そして、この所有権の構造を変革すべきこと、その変革の目的は「能力と働きに応じた分類と分配の原理²⁰」に基づく普遍的アソシエーションの実現であることを主張している。

以上のようなサン・シモン主義者の主張を『組織者』のサン・シモンのそれと比較すると、その中には、『新キリスト教』の思想、すなわち、最も多人数の階級、最も貧しい階級の精神的・物質的福祉の向上を目的として社会を組織せよ、という思想が表われており、それが人間による人間のエクスプロイテーションというフレーズによって引き立てられているのがわかる。近代社会において、最も多人数で最も貧しい階級は労働者階級である。サン・シモン主義者は、この階級が奴隷のような状態に置かれていることをエクスプロイテーションという語で表現し、さらに、この「人間による人間のエクスプロイテーション」が解消されるべきことを根拠として社会の新しい組織化を主張している。

サン・シモン主義において、エクスプロイテーションという語は、現代の労働者を古代の奴隷と結び付ける役割を担っている。古代の奴隷は軍事力によって支配されていたが、現代の労働者は経済力によって支配されている。この支配隷属関係に基づいて、奴隷と労働者は強制労働に従事させられ、物質的、知的、道徳的に禽獣状態に置かれる。サン・シモン主義におけるエクスプロイテーション概念の特徴としては、それが生産関係のあり方を批判する目的で用いられていること、労働者の側に生じる損害、すなわち人間的発達の阻害に焦点が当てられていることが注目される。

2. プルードン

マルクスによれば、プルードンの『所有とは何か』は、「無条件に彼の最良の著作」であり、サン・シモンやフーリエ以後の社会主義文献の中では「画期的な」作品である²¹。この著書においてプルードンは、エクスプロイテーションという語を様々な文脈で使用している。例えば、ある事柄の不誠実な利用というような意味では、次のような文がある。

「人は高利で盗む。福音書の公刊以来かくも憎まれ、かくも厳しく罰せられているこの種の盗みは、禁止された盗みと公認された盗みとの間の過渡的形態をなすものである。したがってそれは、その曖昧な性質からして、法律上および道徳上の多くの矛盾、法律家、財政家、商業者によってきわめて巧妙にエクスプロイトされる矛盾を引起している²²。」

また、生産手段のような何らかの物の利用という意味では、次のような文がある。

「労働については二つの事柄、結合（association）とエクスプロイトしうる材料とを区別しなければならない²³。」

「社会の外では人間はエクスプロイトしうる材料であり、資本化された用具であり、しばしば

不便で無益な動産である²⁴。」

ブルードンは、エクスプロイテーションという語を色々な対象に対して使用しているが、そこに共通する意味を、それに最も近似する日本語で表現するとすれば、上で見たように、それは「利用」であろう。利用の対象が人間となるケースについても、彼は様々な文脈においてエクスプロイテーションという語を用いている。その中で、サン・シモン主義者が多用した「人間による人間のエクスプロイテーション」というフレーズが現われるのは、次の三個所である。

「労働者の賃銀は彼の日常の消費をほとんど超過するものでなく、また明日の賃銀を彼に保証していないのに対し、資本家は、労働者の生産する生産用具のうちに、将来の独立と安全との保証を見出している。ところで、この再生産の酵素、生命のこの永遠の胚種、生産の基礎と用具とのこの準備こそは、資本家が生産者に負い、決して返すことのないものであり、またこれこそは、労働者の赤貧、無為に暮す者の贅沢、条件の不平等を作り出す詐欺的な拒否なのだ。とりわけこの点に、人間による人間のエクスプロイテーションと適切に名づけられるものが存するのである²⁵。」

「力の法から人間に対する人間のエクスプロイテーション、別に言えば奴隷制、高利の金貸、ないし征服者が征服した敵に課する貢税およびこのかくも多くの税金、塩税、国王の特権、賦役、人頭税、小作料、家賃等々の全家族、要するに所有が生じた²⁶。」

「献身は強制されるとき、抑圧、隷従、人間による人間のエクスプロイテーションとよばれるものとなる²⁷。」

エクスプロイテーションという語が「人間による人間のエクスプロイテーション」というフレーズの中で使用されるとき、ブルードンにおいても、生産関係に対する批判という意味合いが前面に出てきているのが分かる。ここでのブルードンの用法を、先に見たサン・シモン主義者のそれと比較すると、両者の間に次のような共通点を見出すことができる。すなわち、エクスプロイテーションの前提としての「力」による支配、エクスプロイテーションの内容としての奴隷制、強制、および徒食者の贅沢と労働者の赤貧、がそれである。一方、ブルードンによって特に強調されていると考えられるのは、生産手段の生産とその取得に関する点である。すなわち、資本家は生産用具を労働者に作らせるが、決してそれを労働者に返すことはない、という点である。この点のメカニズムは、マルクスによって念入りに分析されることになるものである。

3. マルクス

マルクスは、エクスプロイテーションという語を学問的生産活動の最初期のころから用いている。その中でもこの語を特に多用しているのは、エンゲルスとの共作とされる『ドイツ・イデオロギー』の「聖マックス」である。マルクスはマックス・シュティルナーを批判する際、様々な文脈でこの語を使用している。例えば次のようである。

「ここで彼は、私的^{アイゲンツム}所有を所有の概念に転化し、『所有』と『固有^{アイゲン}』とのあいだの語源的つ

なかりをエクスプロイトして、『固有の』ということばは一つの永遠な真理であると言明し……これを理由にして私的所有の廃止の不可能を根拠づけている²⁸。』

「聖サンチョがいましがた非-富を貧乏に転化したとき、彼がどんなに気まま勝手なやり方をしたかということがわかる。わが聖者は、これらのいろいろ違った方法を雑然と適用するのであって、否定を、あるときは一つの意義、あるときは別の意義においてエクスプロイトする²⁹。』

これらは、プルドンのところで見たと同じように、ある事柄の不誠実な利用というような意味でエクスプロイテーションという語を用いているケースであるといえる。エクスプロイテーションの対象が人間であるケースについても、様々な文脈で使用例が見られる。例えば次のようである。

「ドイツ市民たちはあまりに無力で、オランダ人によるエクスプロイテーションを制限できなかった³⁰。』

「イギリス人はただドイツ市民をむやみやたらにエクスプロイトする機会をうかがっていたにすぎない³¹。』

「聖マックス」の中で、サン-シモン主義者やプルドンが用いた「人間による人間のエクスプロイテーション」というフレーズが現われるのは次の1箇所である。

「この功利関係は一つのまったく明確な意味、すなわち、私は他人に損害を与えることによって自分を利する（人間による人間のエクスプロイテーション〔exploitation de l'homme par l'homme〕）という意味をもっている³²。』

この一文は、功利主義批判の文脈の中に現われるものであって、そこでは市場でのブルジョワ同士の関係が論じられている。サン-シモン主義やプルドンの場合、「人間による人間のエクスプロイテーション」というフレーズは、資本-賃労働関係批判の文脈で用いられていたが、ここでは商品-貨幣関係批判で用いられている。サン-シモン主義やプルドンにおいて見られた労働者の側に視点を置いた記述は、マルクスのこの文脈の中には見られず、他者を利用するブルジョワの見地からの記述となっている。『資本論』のマルクスは、主に資本-賃労働関係の分析にエクスプロイテーションという語を用いることになるが、しかし、その際にも労働者を利用する資本家の見地からこの関係を理論化している。この点は、後の節で立ち入って論じる。

マルクスのこの一文は、次のような2つの点でも興味深いものである。

第1に、ここでマルクスは、この「人間による人間のエクスプロイテーション」というフレーズをフランス語のまま記している。ドイツで出版する目的でドイツ語で執筆した文章の中にフランス語のまま記したのであるから、マルクスはこれをフランス思想のフレーズとして強く意識していたものと思われる。ドイツ語にはアウスボイトゥングという類似の意味を持つ言葉があるにもかかわらず、マルクスは晩年までエクスプロイテーションというフランス語からの借用語を使い続けている。マルクスはその際、おそらく上で見たようなフランス思想の批判的継承者であることを意識していたものと推察される。

第2に、これと並んで興味深いのは、このフレーズの前に記された「私は他人に損害を与える

ことによって自分を利する」という一文である。この一文は、それが人間間で行われる場合のエクспロイテーション概念を最も簡潔に言い当てたものであると考えることができる。すなわち、奴隷所有者や資本家の利益は、奴隷や労働者に損害を与えることによって得られる。この損害は、サン・シモン主義者の場合、エクспロイトされる側の「禽獣状態」と表現され、プルドンの場合、「赤貧」と表現されている。「私は他人に損害を与えることによって自分を利する」が1回限りのものではなく長期にわたって繰り返される場合、それは所有者-奴隷、資本家-労働者の関係のように、一方が他方に労働を強制する関係となり、その背景には力による支配が存在する。サン・シモン主義とプルドンの用例に見られるエクспロイテーションの基本的要素は、このように「私は他人に損害を与えることによって自分を利する」という一文の中に包含されうるものである。それゆえ、エクспロイテーションの一般的意味とは何かと問われれば、われわれはこの一文をもってそれに対する答えと見なすことができる。

マルクスとエンゲルスは、『共産党宣言』においてもエクспロイテーションという語を効果的に用いている。しかし、そこでの用法には特に目新しいものはない。エクспロイテーションの概念史の中で、マルクスによって打ち出された新機軸は、『資本論』第1巻における「労働力のエクспロイテーション度 (Exploitationsgrad)」の導入である。マルクスは現行版『資本論』第1巻第3篇第7章で、剰余労働の必要労働に対する比を導出し、これを「労働力のエクспロイテーション度」と名付けた。剰余価値の可変資本に対する比を剰余価値率と名付けたのであるから、剰余労働の必要労働に対する比については、これを剰余労働率と名付けるのが自然かとも思われるが、しかしこれをあえてエクспロイテーション度と呼んだところに、マルクスのこの語に対するこだわりが表われているといえよう。ともかく、この指標の導入によって、労働力のエクспロイテーションは、経済学的に測定できる数量となった。倫理的、政治的批判のための言葉であったエクспロイテーションが、数量的に把握できる概念になったわけである。このことの持つ意味は、すぐ後のエンゲルスのところで見ると、極めて大きなものであったと思われる。

エクспロイテーションの概念史の中で、マルクスが成したもう一つの貢献は、人間による自然のエクспロイテーションについても、これを否定的なものとして把握したことである。これは、サン・シモン主義者と大きく異なる点である。マルクスは『資本論』第3巻第6篇第48章で次のように述べている。

「土地——共同の永遠の所有としての、交替する人間諸世代の連鎖の譲ることのできない生存および再生産の条件としての土地——の自覚的、合理的な取り扱いの代わりに、地力のエクспロイテーションと浪費が現われる³³⁾」

この場合の「地力のエクспロイテーション」は、前後の文脈から判断して、明らかに否定的な意味を込めて使われている。この文の少し後のところには、次のような記述が現われる。

「大工業と大農業とがもともと区別されるのが、大工業はむしろ労働力、それゆえ人間の自然

力を荒廃させ破滅させるが、大農業はむしろ直接に土地の自然力を荒廃させ破滅させることでありとすれば、その後の進展においては両者は握手する。というのは、農村でも工業制度は労働者たちを衰弱させ、工業と商業のほうは農業に土地を枯渇させる諸手段を与えるからである³⁴。」

ここから、マルクスが労働力のエクスプロイテーションを否定的な意味で捉えていただけでなく、土地のエクスプロイテーションについても、その否定的な側面を鋭く捉えていたことが分かる。

サン・シモン主義においては、人間は同胞のエクスプロイテーションを止め、一致協力して自然のエクスプロイテーションに力を注ぐべきであるとされていた。彼らが活躍した19世紀前半のフランスは産業革命の初期段階にあり、自然をエクスプロイトすることによる負の帰結が表面化することはまだなかった。それゆえ彼らの主張は、同時代の人々に対して強い説得力を持ったと思われる。自然のエクスプロイテーションが疑問視され、森林伐採や鉱山開発、干拓、道路・ダム建設、大規模灌漑事業などが見直されるようになるのは、20世紀も後半になってからのことである。そうした中、19世紀後半に、大規模農業による土地のエクスプロイテーションの負の側面に注目し、これを労働力エクスプロイテーションと並べて論じたという事実は、資本主義批判理論としての『資本論』の時代を超えた有用性を示しているといえる。自然の資本主義的エクスプロイテーションは、現在の最も重要な問題領域の1つであり、『資本論』における地力のエクスプロイテーションの議論は、この問題に対して理論的基礎を提供するものとなっている。

4. エンゲルス、カウツキー、ベルンシュタイン

マルクスは、フランス語からの借用語であるエクスプロイテーションを好んで用いていた。『資本論』では、元来のドイツ語であるアウスボイトウングも使用しているが、剰余価値率を論じた第1巻第3篇第7章ではもっぱらエクスプロイテーションを用いており、全体としてエクスプロイテーションの方を多く用いている。最晩年においてもこの傾向は変わらず、例えば「アドルフ・ヴァーグナー著『経済学教科書』への傍注」においても、用いられているのはエクスプロイテーションである³⁵。

これに対してエンゲルスは、エクスプロイテーションよりもアウスボイトウングの方を好んでいたように思われる。ここでは、そのことを示す2つの例を挙げておきたい。

1つ目の例は、エンゲルスによる『資本論』の編集の中に見られるものである。マルクスは、ロワ訳フランス語版『資本論』第1巻の中に新たに多くの文章を書き加えたが、その中に次の部分がある。

「機械による労働者のエクスプロイテーションとは労働者による機械のエクスプロイテーションと同じことである³⁶。」

エンゲルスは、ドイツ語版『資本論』第1巻第3版の中にこの部分を挿入する際、エクスプロ

イテーションをアウスボイトゥングに直している³⁷。

2つ目は、エンゲルスの著書『空想から科学への社会主義の発展』の中に見られる用語選択であり、後世への影響という点からすれば、より重要なものである。ここでは、もはやエクスプロイテーションという語は用いられておらず、専らアウスボイトゥングが用いられている。『反デューリング論』では、デューリングがアウスボイトゥングを用いたからエンゲルスも同一の用語を用いたとも考えられるが、『空想から科学へ』を編むにあたってエンゲルスはアウスボイトゥングをそのまま残し、さらに新しくこの語を書き足してさえいる³⁸。したがって、ここでのエンゲルスの用語選択は、意識的なものであると見なしてよいと思われる。ドイツ語文献では、これ以降エクスプロイテーションはアウスボイトゥングに取って代わられるようになり、カウツキーが『カール・マルクスの経済学説』を出版したとき、そこに記されていたのは「労働力のエクスプロイテーション度」ではなく「労働力のアウスボイトゥング度³⁹」であった。エンゲルスの校閲を受け、彼によって正当なものと認められたといわれるこの書物は版を重ね、『資本論』の解説本としては、当時において最も大きな影響力を持ったと考えられている⁴⁰。

ところで、エンゲルスの『空想から科学へ』においては、労働力のアウスボイトゥングについて、次のような1つの解釈が提出されている。すなわちエンゲルスによれば、「従来の社会主義」は、「労働者階級のアウスボイトゥングを激しく非難す」るだけで、「このアウスボイトゥングの本質がなんであるか、どうしてそれが発生するのかを明らかにすることが」できなかった⁴¹。必要なのは、資本主義的生産様式の歴史的必然性を明らかにし、この生産様式の内的性格を明らかにすることであった。そして「この仕事は剰余価値の発見によってなされた⁴²。」これによって労働者のアウスボイトゥングのメカニズムが証明された。唯物史観と剰余価値の発見によって「社会主義は科学になった⁴³」というのである。

このようなエンゲルスの見解に対しては、エンゲルスの直弟子にあたるベルンシュタインが、『科学的社会主義はいかにして可能か』の中で次のように述べている。

「この説明にもとづけば、剰余価値の科学的証明と社会主義とのあいだには、剰余価値という事実から社会主義の必然性が導き出されるという形で、ひとつの内的関連があるはずであろう⁴⁴。」

しかし、ベルンシュタインによれば、このような形での内的関連は存在しない。その際、彼が依拠するのは、エンゲルスの次の文章である。

「大衆の倫理意識がある経済的事実を、たとえばかつての奴隷制や賦役労働を不正だと宣するなら、それは、その事実そのものがすでに時代遅れになっているということ、別の経済的諸事実が登場してきており、それによって以前の事実が耐えがたいもの、維持しがたいものになったということの証明である⁴⁵。」

この文章に基づいて、ベルンシュタインは次のように結論する。

「つまり、社会の社会主義的変革の必然性を証言するのは、剰余価値という事実そのものの

ではなく、大衆による剰余価値非難なのである。剰余価値がアウスボイトゥングと判定されることは、所与の秩序が耐えがたいものであることの証拠なのであり、そういう表現が許されるならば、所与の状態が維持されがたくなっていることの指標なのである⁴⁶。」

このように、ベルンシュタインによれば、結局のところエンゲルスもアウスボイトゥングを、科学的必然性を示す用語としてではなく、剰余価値を非難するための倫理的用語として使用している、ということになる。その際われわれにとって興味深いのは、ベルンシュタインの以上のような論述において重要な役割を演じているのが、アウスボイトゥングというドイツ語が持つ意味の広がりである、ということである。ベルンシュタインは、先のエンゲルスの文を引用する直前で、次のように述べている。

「人と人との関係を問題とするかぎり、^{アウスボイトゥング}搾取とは、つねに倫理的に排斥されるべき^{アウススツツク}搾りあげなのであり、また——^{ボイテ}掠奪物という語との言葉としてのつながりからしてもわかるように——^{ラウブ}偽装した形での盗取なのである。だから、個々人としてではなく、社会的に眺めるならば、資本家たちは労働者階級の盗取者または掠奪者として立現れるのである⁴⁷。」

マルクスは、先に触れた最晩年の文章の中でも、資本家の利得が労働者からの盗みであるという見解を改めて否定している⁴⁸。そして、彼が『資本論』の剰余価値率の章で用いたのは、フランス語からの借用語であるエクスプロイテーションであって、アウスボイトゥングではなかった。エクスプロイテーションという外来語であれば、その語根である *exploit* には掠奪物という意味はないのであるから、ベルンシュタインが指摘するような意味の連想は、ドイツ人読者の頭の中には容易には生じないであろう。マルクスが、元来のドイツ語であるアウスボイトゥングではなく、外来語のエクスプロイテーションを用い続けた理由の1つとして、ベルンシュタインが指摘したような意味の連想を避けるねらいもあったのかもしれない。

ベルンシュタインは、エンゲルスによる剰余価値論の解釈だけでなく、マルクスの剰余価値論自体に対しても疑問を投げかけている。ここでは、彼の主著である『社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』における見解を見てみよう。ベルンシュタインによれば、「マルクスの体系においては剰余価値を生みだす労働がいかにかせまく限定されているか⁴⁹」ということが注目されるべきであり、この体系では資本主義的生産を担う様々な「諸機能の評価という点である種の恣意がみられる⁵⁰」。また、彼によれば、「剰余価値率をアウスボイトゥング率などと呼ぶ、その名づけかた⁵¹」にそもそも問題がある。というのは、「今日、われわれが最もめぐまれた地位にある労働者に出会い、一部の『労働貴族』に出会うのは、きわめて高い剰余価値率をもつ産業においてであり、もっとも恥辱的に酷使されている労働者に出会うのは、きわめて低い剰余価値率をもつ産業において⁵²」であるからである。つまり、マルクスの労働力のアウスボイトゥング率は、労働者のアウスボイトゥングの実態を正しく反映するものとはなっていない、というのである。

前節でも述べたように、エクスプロイテーションの概念史におけるマルクスのオリジナルな貢献の1つは、労働力エクスプロイテーションの度合いを計測する1つの指標を提出したことであ

る。だとすれば、マルクスのこの指標が、エクスプロイテーションあるいはアウスボイトウングの度合いを計測するという目的にとって、実は不適切であるとするベルンシュタインの批判は重要である。節を改めてこの点を検討してみよう。

5. マルクスの労働力エクスプロイテーション度の検討

マルクスの労働力エクスプロイテーション度を検討する際に留意されるべき点は、まず第1に、マルクスは「エクスプロイテーション」という概念を導入したのではなく、「労働力のエクスプロイテーション度」という1つの指標を導入した、という点である。労働者のエクスプロイテーションについては、本稿第1節でみたように、すでにサン・シモン主義者が次のような事態を指摘していた。すなわち、使用者と労働者との取引は、労働者の自由になるものではなく、労働者が生命を維持するために受け入れざるを得ないものであり、この経済的力関係に基づいて使用者は労働者を使用し、それによって労働者は「禽獣状態」に置かれる、というのがそれである。サン・シモン主義者によれば、これが現代における「人間による人間のエクスプロイテーション」である。マルクスが『資本論』第1巻第2篇「貨幣の資本への転化」で取り上げているのも、労働者が生命を維持するためには自分の労働力を資本家に売らざるをえないという、この理論的な事実である⁵³。続く第3篇「絶対的剰余価値の生産」では、この事実に基づいて、剰余価値生産のメカニズムが明らかにされ、さらにこのメカニズムの解明に基づいて「労働力エクスプロイテーション度」が導入される。労働者のエクスプロイテーションはマルクス以前から問題とされていた事実であって、マルクスが新たに導入したのは、この事実の度合いを測るための1つの指標である。

前節で見たように、エンゲルスは、従来の社会主義者はアウスボイトウングを非難するだけで、それが何であるかを明らかにすることができなかった、と述べた。しかし、このアウスボイトウングがエクスプロイテーションと同一の概念であるとするれば、エンゲルスのこの指摘は、やや正確性を欠くものであると言わなければならない。というのは、マルクスが『資本論』で明らかにしているのは、エクスプロイテーションが何であるかではなくて、その度合いを表現する方法であり、また、資本-賃労働関係がエクスプロイテーション関係だということではなく、この関係の再生産のメカニズムであるからである。それゆえ、仮に、マルクスの労働力エクスプロイテーション度に理論的誤謬が見出され、これが放棄されるべき理論として認識されたとしても、このことによって資本家と労働者のエクスプロイテーション関係もが否定されるということにはならない。後者は1つの事実であって、この事実の度合いを計測するための尺度が壊れたとしても、事実の方は依然として存続し続けるからである。

第2に、上記の事柄に付随して、次のような留意点も出てくる。すなわち、剰余労働の必要労働にたいする比でエクスプロイテーションの度合いを把握するというマルクスの「労働力のエクスプロイテーション度」は、エクスプロイテーション度を把握するための1つの方式であるにす

ぎない、という点がそれである。この方式は、一工場で生産される生産物価値から不変資本を引き、それと労賃とから剰余価値率を算出し、さらにそこから必要労働時間と剰余労働時間を導き出すものであり、この操作の前提となっているのは労働価値説である。ベルンシュタインは、労働価値説を疑問視し、前節で取り上げた著作の中で、これに基づかないでアウスボイトウングの度合いを把握しようとする方式を紹介している⁵⁴。その後も、マルクスの労働力エクスプロイテーション度について、これが理論的に、あるいは数学的に支持されるものであるか否かという問題が、多くの研究者によって検討されてきた。この検討の結果、もしも否定的な結論が出た場合には、労働力エクスプロイテーション度を把握するマルクス方式は放棄されることになるが、同時に、これに代わる新たな方式が開発される必要も生じることになる。マルクスの労働力エクスプロイテーション度が否定されたとしても、資本家による労働者のエクスプロイテーションという事実は存続し続けるからである。

第3に、ベルンシュタインの批判を検討する際には、とりわけ次の点が注目されるべきである。すなわち、マルクスの「労働力のエクスプロイテーション度」は、資本家すなわちエクスプロイターの側から見た指標であって、エクスプロイトされる労働者の被害に焦点を当てたものではない、という点がそれである。『資本論』第1巻第5章第2節「価値増殖過程」から第7章「剰余価値率」までのところでは、資本家がどのようにして剰余価値を獲得するかが論述されている。労働者の立場にも焦点が当てられ、労働者の側に生じる被害または損害が取り上げられるのは第8章「労働日」以降である。しかし、労働力エクスプロイテーション度は第7章で導入されるため、そこには労働者の側の視点、すなわちエクスプロイトされる側の視点が直接的には現われてこないのである。

エクスプロイターの側から見れば、彼らの利益は剰余価値であるから、労働力エクスプロイテーションの度合いは、剰余労働の必要労働にたいする比によって正確に把握されうることになる。しかし、視点をエクスプロイターからエクスプロイトされる側に移せば、異なった事態が出現する。エクスプロイトされる側、すなわちエクスプロイテッドから見れば、彼が被る損害は、単に資本家のために剰余労働をするということだけにあるのではなく、サン・シモン主義者が指摘したように、長時間労働と貧困によって人間的発達が阻害され「禽獣状態」に置かれるということにもある。こうした「禽獣状態」は、『資本論』でも第1巻第8章以降のところでも繰り返し詳述されるから、労働者が被る損害についてマルクスはサン・シモン主義者と共通した認識を持っていたといえる。しかし、エクスプロイテーションの度合いを計測する目的でマルクスが提出した尺度は、エクスプロイターが得る利益の大きさに着目するものであったため、エクスプロイテッドが被る人間的損害は、マルクスの労働力エクスプロイテーション度では、直接には把握できないのである。つまり、マルクスが考案した指標は、エクスプロイテーション度であって、被エクスプロイテーション度ではないということである。

ベルンシュタインは次のように述べた。

「今日、われわれが最もめぐまれた地位にある労働者に出会い、一部の『労働貴族』に出会うのは、きわめて高い剰余価値率をもつ産業においてであり、もっとも恥辱的に酷使されている労働者に出会うのはきわめて低い剰余価値率をもつ産業においてではないか。」

『資本論』第3巻第2篇第8章では、剰余価値率は、資本主義的生産様式の発達とともにすべての生産部面で均等化されていくと述べられており、第2篇の論述を通して剰余価値率はすべての生産部面で同一であると前提されている。しかし、そこでは剰余価値率均等化を阻止する障害についても言及されており、こうした障害が労賃に関する特殊研究では重要であることも示唆されている。実際の経済社会においては、こうした障害が、ベルンシュタインの時代においても現代においても実存していると考えられる。そうすると、ある生産部面では労働生産力が極めて高いため労賃も高いが剰余価値率も高い一方で、別の生産部面では労働生産力が低いいため労賃は低いが剰余価値率も低い、という事態も十分に起こり得る。この場合、ベルンシュタインが述べているように、剰余価値率の高い産業にめぐまれた労働者が見出され、剰余価値率の低い産業に恥辱的に酷使される労働者が見出される、という事態も起こり得るであろう。マルクスは、「剰余価値率は、資本による労働力の、または資本家による労働者の、エクスプロイテーション度の正確な表現である⁵⁵」と述べているが、そうだとすると、「めぐまれた地位にある労働者」は「恥辱的に酷使されている労働者」よりも、より高い度合いでエクスプロイトされていることになる。このような状況では、労働者はより高度にエクスプロイトされることを自ら希望することになるであろう。ベルンシュタインは、このような点に違和感を持ち、剰余価値率をアウスボイトゥング度と呼ぶことを疑問視したのだと考えられる。このベルンシュタインの見地は正しいであろうか。

すでに述べたように、マルクスの労働力エクスプロイテーション度は、エクスプロイターすなわち資本家の観点から把握されたものであり、彼らのもとに生じる利益に着目したものである。資本の人格化としての資本家の利益は剰余価値であるから、剰余価値率が高いのであれば、労働者の状態がめぐまれているか恥辱的であるかは問題ではない。労働者の状態にかかわらず、剰余労働の割合が大きければ大きいほど、剰余価値率は高く、資本家は労働者をより高度にエクスプロイトしたということになる。したがって、この点では、ベルンシュタインの批判は的をはずしている。

しかし、サン＝シモン主義以来のエクスプロイテーションという言葉の使われ方に着目すれば、ベルンシュタインの批判にも一定の正当性が出てくる。仮にマルクスが、剰余労働の必要労働にたいする比を「剰余労働率」とでも名付けていたとすれば、このような批判は提出されなかったであろう。しかし、マルクスはこれをあえて労働力のエクスプロイテーション度と名付けた。そして、この命名法により、『資本論』はサン＝シモン等から続くフランス社会主義思想と連結されることとなった。本稿第1節で見たように、サン＝シモン主義者によって「人間による人間のエクスプロイテーション」というフレーズが用いられる場合、そこで強調されていたのは労

働者の置かれた物質的・知的・道徳的禽獣状態であり、こうした視点の背景にあるのは「最も多人数の階級、最も貧しい階級の精神的・物質的福祉の向上を目的として社会を組織せよ」というサン・シモンの思想であった。マルクスは「人間による人間のエクスプロイテーション」を「私は他人に損害を与えることによって自分を利する」と言い換えたが、しかし彼の労働力エクスプロイテーション度では、資本家の利益が強調される一方で、労働者の損害が前面には出てきていない。資本家の利益は剰余価値であるのに対して、労働者の損害は全人間的なものであり、資本家のために剰余労働をすることだけではない。しかし、この労働者の人間的発達の阻害が、労働力エクスプロイテーション度では、後景に退けられているのである。それゆえ、労働者のエクスプロイテーションあるいはアウスボイトゥングというからには、その度合いは、労働者が置かれた状態とも対応するものであるべきだ、とする趣旨のベルンシュタインの批判は、思想史的には正当なものであると思われる。つまり、マルクスの労働力エクスプロイテーション度は、労働者の損害全体を取り込んだ別の尺度によって補完される必要があるのである。

節を改めて、エクスプロイテーションの度合いを計測するためのマルクスとは異なるアプローチを見てみよう。

6. ヌスバウム

資本家と労働者のエクスプロイテーション関係を、マルクスとは異なった観点から把握しようとする際に示唆的なのは、動物生態学におけるエクスプロイテーション概念である。そこでは、生態系の中の二種間の関係において、「一方の生物が利益を得て、他方の生物が損害を被る⁵⁶」場合、この関係がエクスプロイテーションと分類される。捕食者と餌生物の関係や寄生者と宿主の関係がこれにあたる。この場合、捕食者や寄生者のようなエクスプロイターは、餌生物や宿主のようなエクスプロイテッドなしでは生存できないのであるから、彼らの利益が何であるかは明らかである。一方、エクスプロイテッドが被る損害は、個体においては死、病気、成長や生殖が阻害されること等であり、個体群においては出生率の低下、死亡率の増加、それによる個体群の増加率の減少等として把握される。

資本主義的な生産有機体における資本家と労働者のエクスプロイテーション関係においても、資本家が得る利益は剰余価値または利潤として比較的明瞭であるのに対し、労働者が被る損害は様々な側面から把握されうるものである。その損害の中には、死や病気、成長や生殖の阻害といった生物学的な要因が算入されるべきであることは明らかであるが、労働者の場合、単なる動物以上の存在であるところの人間であるゆえに、知的、道徳的な損害も算入されなければならない。というよりもむしろ、エクスプロイテッドが人間である場合、この精神的側面こそが重視されなければならない。この点は、サン・シモン主義者によって指摘されていたところである。彼らは、一方の人間によって他方の人間が「禽獣状態」に置かれていることに、人間による人間のエクスプロイテーションを見出したのであった。

それでは、人間を禽獣とは異なる精神的存在者として措定した上で、この存在者が被る損害を様々な側面から把握し、それによって労働者の取り扱いがどの程度エクスプロイタティブなものであるかを計測するためには、どのような方式がありうるであろうか。このような課題に取り組むためには、われわれは、剰余価値率のような純経済学的な領域にのみ留まっていることはできず、視野を哲学および社会科学全般へと改めて広げてみる必要がある。そうすると、まずはじめにわれわれの視界に入ってくるのはマルクス自身の『経済学・哲学草稿』であり⁵⁷、その思想を発展させたマーサ・ヌスバウムのケイパビリティ・アプローチである。

マルクスは、『経済学・哲学草稿』の「疎外された労働」の部分で、労働疎外論の内容を一通り説明し終えた後で、「これまでわれわれはこの関係を労働者の側からしか考察しなかったが、われわれはあとでそれを、非労働者の側からも考察するつもりである⁵⁸」と述べている。先に指摘したように、『資本論』第1巻の「価値増殖過程」から「剰余価値率」までのところでは、マルクスは主に資本家の側から資本-賃労働関係を考察している。これに対して、「疎外された労働」のところでは、彼は労働者の側に視点を置き、そこから資本-賃労働関係を考察している。そこでは、労働疎外によって労働者の側に生じる損害が克明に記述され、これを前提として私有財産および資本家の存在が導き出されている。その際、労働者が被る損害は、サン-シモン主義者が「禽獣状態」と言ったのと同じように、マルクスにおいてもやはり人間の動物化である。マルクスは疎外された労働の第2規定の内容を述べた後、それを次のようにまとめている。

「以上のことからつぎのような結果が生じてくる。すなわち、人間（労働者）は、ただわずかに彼の動物的な諸機能、食うこと、飲むこと、産むこと、さらにせいぜい、住むことや着ることなどにおいてのみ、自発的に行動していると感じるにすぎず、そしてその人間的な諸機能においては、ただもう動物としてのみ自分を感じるということである。動物的なものが人間的なものとなり、人間的なものが動物的なものとなるのだ。食うこと、飲むこと、産むこと、等々は、なるほど真に人間的な諸機能ではある。しかし、それらを人間的活動のその他の領域からひきはなして、最後の、唯一の究極目的にしてしまうような抽象がされる場所では、それらは動物的である⁵⁹。」

本節でのわれわれの課題は、資本-賃労働関係というエクスプロイテーション関係において労働者の側に生じる損害を把握すること、言い換えれば、労働力の被エクスプロイテーション度を計測することであるが、われわれはそのための1つの手掛かりを、この引用文の中に見出すことができる。それは「真に人間的な諸機能」という概念である。この「真に人間的な諸機能」を客観的に示すことができれば、われわれはその阻害状況によって労働者の被エクスプロイテーションの度合いをある程度把握することができるであろう。マルクスは、「真に人間的な諸機能」の性格について、続く第3規定のところで「自由な意識的活動⁶⁰」と記し、また別のところでは「人間は真に共同的な存在である、というのが人間の本質である⁶¹」と述べている⁶²。しかし彼は、「真に人間的な諸機能」の内容を、われわれが利用できるような形に整理し、明示してくれ

たわけではない。『経済学・哲学草稿』は未完のまま残され、その後も、マルクスは人間本質論を主題とした論考を公表することはなかった。しかし、1932年に『経済学・哲学草稿』が出版されると、そこで展開されていた労働疎外論は多くの論者の注目を集め、新たな思想の源泉として利用されるようになった。現代アメリカの政治哲学者マーサ・ヌスバウムも、そのような論者の1人であり、われわれは彼女の思想の中にマルクスの人間本質論の1つの発展形態を見出すことができる。

ヌスバウムは、「マルクスやアリストテレスの『真に人間的な機能』という考え方⁶³」に基づいて、人間が人間らしく生活するために持つべき能力（ケイパビリティ）を倫理的見地から整理し、リストアップしている。それは、「①生命、②身体的健康、③身体的保全、④感覚・想像力・思考、⑤感情、⑥実践理性、⑦連帯、⑧自然との共生、⑨遊び、⑩環境のコントロール」から成る10項目のリストであり、「人間の中心的な機能的ケイパビリティ」と名付けられている⁶⁴。各項目については、「①**生命** 正常な長さの人生を最後まで全うできること。人生が生きるに値しなくなる前に早死にしないこと⁶⁵」というような形で、その項目に対応するケイパビリティの内容がある程度具体的に記されている。ヌスバウムのアプローチにおいては、「真に人間的な諸機能」のための様々なケイパビリティが、1つの一覧表として明示的に提出されているのである。

ヌスバウムは、このようなリストを作成した上で、次のように述べている。

「私たちのリストは、女性の扱いがエクスプロイタティブであるのかないのかに関して、ある程度の方が言えるところまで導いてくれる⁶⁶。」

このリストは、インドのような発展途上国の女性の生活状態を想定して作成されているため、アメリカのような先進国ではあまり役に立たないのではないかという指摘がある⁶⁷。しかし、日本で生活する成年男子労働者に対してこのリストを適用してみるならば、幾つかのケイパビリティが未達成とされる者が相当程度出てくるであろうことは確かであると思われる。というのは、過労死に追い込まれる労働者は、このリストの第1項目すらクリアしていないからである。健康体で定年退職を迎えることができた労働者であっても、第7項目以降のケイパビリティが未達成であった人々を、われわれは日本社会の中かなりの程度見出すことができるように思われる。

マルクスは、『資本論』第1巻第8章第1節で、労働日の延長によって労働者が被る損害を取り上げ、その計測方法を記している。それは、「労働力の正常な持続と健全な発達とに合致する」ところの「合理的な労働基準」に基づいて計測されるものであり、そこでは、資本家がこの労働基準を超えて労働日を延長する場合、労働力の寿命はその分だけ縮減され、資本家は労働力の価値をその分だけ盗むことになる」と記されている⁶⁸。この場合、資本家による労働力の価値の盗みは、「労働力の正常な持続と健全な発達」の障害に一致するものであるから、これによって労働力の被エクスプロイテーション度が把握されている、ともいえる。つまり、労働者の損害に

着目したエクспロイトーション度は、マルクス自身によって提出されていたと考えることもできるのである⁶⁹。しかし、第8章で提出されたこの方式は、仮想的な労働者の口を借りて語られるものであり、第7章で定式化された労働力エクспロイトーション度に比べて、理論的に不確定な性格を持っている。第8章の計測方式で資本家と労働者とのエクспロイト関係の度合いを把握するためには、「労働力の正常な持続と健全な発達」を構成する要素は何なのかが明らかにされなければならない。そしてそれらを達成するためにはどのような条件が必要であるのかが明らかにされなければならない。労働者は、労働力の所有者である以前に人間でなければならないから、この作業は、真に人間的な機能とは何なのかを具体的かつ客観的に記述するところから始まることになる。ヌスバウムのケイパビリティのリストは、真に人間的な機能の内容を記述する試みであり、この点でマルクス理論の1つの発展形態であるといえる。

ところで、ヌスバウムのケイパビリティ・アプローチは、個々の人間の生活状態を問うものである。これは、企業の決算書類から導出されるマルクスの労働力エクспロイトーション度とは明らかに異なるものである。マルクスの労働力エクспロイトーション度は、一工場全体で生産された生産物価値から導出されるところの剰余価値率で表現されるものであり、人間の個性ははじめから捨象されている。そもそも価値という概念は、抽象的人間労働に対応するものであって、個別具体性の対極にあるものである。これに対して、人間の取り扱いに対するヌスバウムのアプローチは個別具体的であり、カントの道徳哲学に由来する「ひとりひとりを目的とする原理⁷⁰」に基づいている。ケイパビリティのリストはひとりひとりの人間に対して適用され、ケイパビリティの達成状況によって、その個人がエクспロイタティブな取り扱いを受けたのか否かが判定されることになる。

このように、人間による人間のエクспロイトーションをどのように捉えるかという点において、ヌスbaumと『資本論』のマルクスとの間には基本的な相違がある。このような相違は、やはり、資本家と労働者のエクспロイトーション関係を、どちらの側から見るかに基づくものであると考えられる。資本家の側から見るならば、彼の利益は剰余価値であるから、労働者は価値の形成者としての抽象的人間労働に抽象化される。資本家の見地からは、森林の木々や鉱山の鉱物が価値の担い手でしかないように、森林労働者や鉱山労働者も抽象的人間労働の支出者でしかない。一方、労働者の側から見るならば、彼が被る損害は、剰余労働の支出にのみみるのではなく、それによって惹起されるところの労働力寿命の低下等にあるのであり、これらは肉体的・精神的損害として把握される。こうした損害は、価値という数量的実体に直接還元できるものではなく、ある程度の具体性を持った記述が必要とされることになる。

いうまでもなく、マルクスの『資本論』は、『経済学批判』の「序言」に記された考察プラン「資本、土地所有、賃労働、国家、外国貿易、世界市場」のうちの「資本」に対応するものであって、「ブルジョア経済の体制」を「資本」に焦点を当てて分析した書物である。『経済学・哲学草稿』で行われたような労働者に焦点を当てた分析は、『資本論』ではなく、『賃労働論』の方

に割り当てられていたと考えられる。しかし、『資本論』の中にも労働者の側に焦点を当て、労働者が被る損害状況を記した部分が、かなりの分量で存在している。その代表的な箇所が、第1巻第8章「労働日」である。そこでは、労働者の状態が個別具体的に記述され、しばしば労働者の氏名すら記されている。このことは、資本主義的なエクスプロイテーション関係を労働者の側から見る場合、個別性を捨象した抽象的アプローチだけでなく、個々の人間の生活状態に着目するヌスバウムのようなアプローチも必要であることを示している。マルクスは『賃労働論』を書かずに没したが、われわれはその内容の一部を、ヌスバウムのアプローチなどを用いて記述してみることができるように思われる。

注

- 1 本稿では、邦訳文を引用する際、原語が *exploit* を語幹とする語である場合、すべてエクスプロイト、エクスプロイテーション、エクスプロイテッド、エクスプロイター等のカタカナ表記に直した。原語が *Ausbeutung* である場合については、これをアウスボイトゥングとカタカナ表記に直した。
- 2 例えば、『共産党宣言』の中の *Exploitation des Weltmarkts* という語句は、①岩波文庫訳では「世界市場の搾取」、②全集訳では「世界市場の開発」、③都留大治郎訳では「世界市場の利用」、④的場昭弘訳では「世界市場の制覇」と訳されている。「搾取」と「開発」と「利用」と「制覇」は、通常、それぞれ著しく異なった文脈で使用される日本語である。同一の原語に対してこれほど異なった訳語が用いられてきたという事実は、*EXPLOITATION* を既成の適切な日本語に置き換えることがほぼ不可能に近いことを示していると思われる。①マルクス／エンゲルス『共産党宣言』大内兵衛・向坂逸郎訳、岩波文庫、1971年、44ページ。②『マルクス＝エンゲルス全集第4巻』大月書店、1960年、479ページ。③『世界の大思想Ⅱ-4 マルクス経済学・哲学論集』河出書房、1967年、282ページ。④カール・マルクス『新訳共産党宣言初版ブルクハルト版（1848年）』的場昭弘訳・著、作品社、2010年、46ページ。*Marx-Engels Werke*, Bd. 4, Berlin: Dietz Verlag, 1959, S. 466.
- 3 『サン＝シモン著作集第三巻』森博編・訳、恒星社厚生閣、1987年、379ページ。*Œuvres de Saint-Simon & d'Enfantin, XX^e volume*, Réimpression photomécanique de l'édition 1865-78, Aalen: Otto Zeller, 1964, p. 194.
- 4 同上、378ページ。*Ibid.*, p. 192.
- 5 同上、379-380ページ。*Ibid.*, pp. 194-195.
- 6 同上、336ページ。*Ibid.*, p. 127.
- 7 同上、379ページ。*Ibid.*, p. 193.
- 8 同上。*Ibid.*
- 9 マルクス『資本論』第三巻、資本論翻訳委員会訳、上製版、新日本出版社、1997年、1064ページ。*Marx-Engels Werke*, Bd. 25, Berlin: Dietz Verlag, 1964, S. 618.
- 10 同上。*Ebd.*
- 11 『サン＝シモン著作集第五巻』森博編・訳、恒星社厚生閣、1988年、246ページ。*Œuvres de Saint-Simon & d'Enfantin, XXIII^e volume*, Réimpression photomécanique de l'édition 1865-78, Aalen: Otto Zeller, 1964, p. 109.
- 12 同上、267ページ。*Ibid.*, p. 144.
- 13 バザールほか『サン＝シモン主義宣言——サン＝シモンの学説・解義、第一年度、1828-1829』野地洋行訳、木鐸社、1982年、83ページ。*Doctrine de Saint-Simon. Exposition. Première année. 1829*. Paris, 1830, p. 93.
- 14 同上、76ページ。*Ibid.*, p. 85.

- 15 同上, 93 ページ。 *Ibid.*, p. 103.
- 16 同上, 95 ページ。 *Ibid.*, p. 105.
- 17 同上, 96 ページ。 *Ibid.*
- 18 同上。 *Ibid.*, p. 106.
- 19 同上, 95 ページ。 *Ibid.*, p. 105.
- 20 同上, 102 ページ。 *Ibid.*, p. 112.
- 21 『マルクス=エンゲルス全集第16巻』大月書店, 1966年, 23 ページ。 *Marx-Engels Werke*, Bd. 16, Berlin: Dietz Verlag, 1962, S. 25.
- 22 『プルドンⅢ』アナキズム叢書, 三一書房, 1971年, 280 ページ。 *Œuvres complètes de P.-J. Proudhon, tome I*, nouvelle édition, Paris: Librairie Internationale, 1873, p. 207.
- 23 同上, 148 ページ。 *Ibid.*, p. 100.
- 24 同上, 262 ページ。 *Ibid.*, p. 191.
- 25 同上, 142 ページ。 *Ibid.*, p. 95.
- 26 同上, 284 ページ。 *Ibid.*, p. 210.
- 27 同上, 297 ページ。 *Ibid.*, p. 221.
- 28 『マルクス=エンゲルス全集第3巻』大月書店, 1963年, 229 ページ。 *Marx-Engels Werke*, Bd. 3, Berlin: Dietz Verlag, 1958, S. 211. 文中の……は引用者による省略部分。
- 29 同上, 287-288 ページ。 *Ebd.*, S. 261.
- 30 同上, 189 ページ。 *Ebd.*, S. 177.
- 31 同上, 191 ページ。 *Ebd.*, S. 179.
- 32 同上, 442 ページ。 *Ebd.*, S. 394.
- 33 前掲『資本論』第三巻, 1424-1425 ページ。 a.a.O., S. 820.
- 34 同上, 1426-1427 ページ。 *Ebd.*, S. 821.
- 35 『マルクス=エンゲルス全集第19巻』大月書店, 1968年, 358, 371 ページ。 *Marx-Engels Werke*, Bd. 19, Berlin: Dietz Verlag, 1962, S. 359, 370.
- 36 カール・マルクス『フランス語版資本論下巻』江夏美千穂/上杉聰彦訳, 法政大学出版局, 1979年, 79 ページ。 *Marx-Engels Gesamtausgabe* (MEGA), II. Abt., Bd. 7, Berlin: Dietz Verlag, 1989, S. 380.
- 37 *Marx-Engels Gesamtausgabe* (MEGA), II. Abt., Bd. 8, Berlin: Dietz Verlag, 1989, S. 430.
- 38 例えば、『反デューリング論』の中の「従来の社会主義は, なるほど現存の資本主義的生産様式とその諸結果とを批判したけれども, それらを説明することができず, したがってまた, それらのかたをつけることもできなかった。それは, この生産様式を単純にわるいものとして排斥することしかできなかった。」という文章の直後に、『空想から科学へ』の中では「従来の社会主義は, 資本主義的生産様式と切りはなせない労働者階級のアウスボイトゥングを激しく非難すればするほど, ますます, このアウスボイトゥングの本質がなんであるか, どうしてそれが発生するのかを明らかにすることができなくなった。」という文章が付加されている。『マルクス=エンゲルス全集第20巻』大月書店, 1968年, 26 ページ。 *Marx-Engels Werke*, Bd. 20, Berlin: Dietz Verlag, 1962, S. 26. 『マルクス=エンゲルス全集第19巻』大月書店, 1968年, 205-206 ページ。 *Marx-Engels Werke*, Bd. 19, Berlin: Dietz Verlag, 1962, S. 209.
- 39 Karl Kautsky, *Karl Marx' Ökonomische Lehren, Gemeinverständlich dargestellt und erläutert von Karl Kautsky*, Neunte Auflage, Stuttgart, 1904, S. 86, und Zweiundzwanzigste Auflage, Stuttgart, 1922, S. 80.
- 40 カール・カウツキー『マルクスの経済学説—『資本論』入門—』相田慎一訳, 丘書房, 1999年, 「訳者解説」参照。
- 41 前掲『マルクス=エンゲルス全集第19巻』205-206 ページ。 *Marx-Engels Werke*, Bd. 19, a.a.O., S. 209.
- 42 同上。 *Ebd.*
- 43 同上。 *Ebd.*
- 44 エドゥアルト・バルンシュタイン「科学的社会主義はいかにして可能か—エドゥアルト・バルンシュタ

- インの講演—」佐瀬昌盛訳『現代思想第7巻社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』ダイヤモンド社、1974年、297ページ、Eduard Bernstein, “Wie ist wissenschaftlicher Sozialismus möglich?”, in *Ein revisionistisches Sozialismusbild: Drei Vorträge*, Herausgegeben und eingeleitet von Helmut Hirsch, 2. Aufl., Berlin, Bonn-Bad Godesberg: Dietz, 1976, S. 57.
- 45 同上、300ページ。Ebd., S. 59.
- 46 同上。Ebd.
- 47 同上、299ページ。Ebd.
- 48 前掲『マルクス＝エンゲルス全集第19巻』358-359ページ。*Marx-Engels Werke*, Bd. 19, a.a.O., S. 359f.
- 49 エドゥアルト・ベルンシュタイン「社会主義の諸前提と社会民主主義の任務」佐瀬昌盛訳『現代思想第7巻社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』前掲、84ページ。Eduard Bernstein, *Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie*, Herausgegeben und mit einem Nachwort versehen von Manfred Tetzl, Berlin: Dietz Verlag, 1991, S. 59.
- 50 同上。Ebd.
- 51 同上、86ページ。Ebd., S. 60.
- 52 同上、87ページ。Ebd.
- 53 マルクス『資本論』第一巻、資本論翻訳委員会訳、上製版、新日本出版社、1997年、289ページ。*Marx-Engels Werke*, Bd. 23, Berlin: Dietz Verlag, 1962, S. 183.
- 54 前掲「科学的社会主義はいかにして可能か—エドゥアルト・ベルンシュタインの講演—」301ページ。Eduard Bernstein, “Wie ist wissenschaftlicher Sozialismus möglich?”, a.a.O., S. 60f.
- 55 前掲『資本論』第一巻、370ページ。*Marx-Engels Werke*, Bd. 23, a.a.O., S. 232.
- 56 W. C. Alee, Orlando Park, Alfred E. Emerson, Thomas Park, Karl P. Schmidt, *Principles of Animal Ecology*, Philadelphia and London: W. B. Saunders Company, 1949, p. 698.
- 57 『経済学・哲学草稿』の疎外概念は、剰余価値率で表現されるところのエクスプロイテーション度の概念よりも、資本-賃労働関係における労働者の境遇をより包括的に把握しようものである。松井暁「疎外論と正義論」（『専修経済学論集』第105号、2010年3月）によれば、資本家による剰余価値の取得としての搾取論は正義論の一部であり、正義論は疎外論の一部である。
- 58 マルクス『経済学・哲学草稿』城塚登・田中吉六訳、岩波文庫、1964年、101ページ。*Marx-Engels Werke*, Bd. 40, Berlin: Dietz Verlag, 1985, S. 519.
- 59 同上、92-93ページ。Ebd., S. 514 f.
- 60 同上、95ページ。Ebd., S. 516.
- 61 マルクス『経済学ノート』杉原四郎・重田晃一訳、未来社、1962年、96ページ。Ebd., S. 451.
- 62 人間の本質の二側面、すなわち「自由な意識的活動」と「真に共同的な存在」の関係については、沢田幸治「マルクスの「類=類的存在」概念について」『商経論叢』第42巻第3号、神奈川大学経済学会、2006年12月、参照。
- 63 マーサ C. ススバウム『女性と人間開発—潜在能力アプローチ』池本幸生・田口さつき・坪井ひろみ訳、岩波書店、2005年、16ページ。Martha C. Nussbaum, *Women and Human Development: The Capabilities Approach*, Cambridge: Cambridge University Press, 2000, p. 13.
- 64 同上、92-95ページ。*Ibid.*, pp. 78-80.
- 65 同上、92ページ。*Ibid.*, p. 78.
- 66 同上、193ページ。*Ibid.*, pp. 159-160.
- 67 See, e.g., Kimberly A. Yuracko, *Perfectionism and Contemporary Feminist Values*, Bloomington Indiana University Press, 2003, p. 43.
- 68 前掲『資本論』第1巻、397-399ページ。*Marx-Engels Werke*, Bd. 23, a.a.O., S. 248f.
- 69 長島誠一『エコロジカル・マルクス経済学』（桜井書店、2010年）の174ページの次の記述に現われる「生物的搾取」は、本稿で取り上げているところの「労働者が被る損害に着目したエクスプロイテーション」

ン概念」と概ね一致する概念であるように思われる。「『資本＝賃労働』関係は、一方で経済的搾取（剰余価値生産）を強制するとともに、他方では労働者に劣悪で不健康な労働条件を押しつけ、生物としての人間の寿命を短縮化させる傾向があった。マルクスも当然この両面を『資本論』において詳細に分析した。通説的なマルクス経済学では、労働力の価値どおりの販売を前提にして剰余価値論が重視されてきたが、マルクスと同様にその前提や労働力の生物的搾取についても関心を払わなければならない。」

70 前掲『女性と人間開発—潜在能力アプローチ』87 ページ。Nussbaum, *op. cit.*, p. 74.